

教育問題

自信と誇りの欠如

2019.01 後藤 忠

教育問題は大人の問題である。

子供は大人を映す鏡、社会を映す鏡にすぎない。教育問題に手をこまねいては10年後、20年後にはもっと深刻な事態になる、だから今から手を打つのが教育問題である。

以下に指摘する教育問題の兆候は、確かに自分にもあると感じられる大人は感性の豊かな大人だと言える。

今、子供の生きる力が衰退し、生活は危機に瀕している。

情緒の不安や乱れ

「ぐずぐずしない！ 早く、早く！」

常に追いたてられる忙しく毎日…。

「ねえ、今日遊べる？」昔なかった子供同士の会話…。下校すると男の子はバットやグローブを、女の子はまりやとび縄をもって外に出た。そこには必ず誰かがいて、毎日一緒に遊んだ。それが子供の放課後の風景だった。遊びは子供の仕事だった。

だが今は、外で遊ぶ子供の姿が見えない。

忙し過ぎる日常生活に子供のフラストレーションはたまる…。落ち着きがない、集中できない、イライラする、キレる…。子供の情緒は乱れている。

耐性の欠如

辛さ、苦しさに耐えられない、我慢、辛抱ができない。

「あんなりたい、こうなりたい…」子供は子供らしい夢はもつ。しかし、夢の実現への努力が続かない、失敗するとへこむ、くさる。失敗を恐れ、チャレンジしなくなる…。

耐性の欠如が人間関係に顕れると深刻だ。人の失敗や過ちが許せない、失敗するのはお互い様と分かっている、どうしても許せない…。

社会性の未発達

人とかかわれ(ら)ない、かかわらなくても構わない、人と協働して何かをするよりひとりでする方が面倒くさくなくてずっといい…。

だから、人の痛みや苦しみ、喜びが分からない…。

自立の遅れ

自分のことが自分でできない、自分のことが自分で決められない、自分の後始末が自分でできない…。

自己の言動の責任が取れない、取ろうとしない、みんな人のせいになる…。(社会的、経済的、精神的自立の遅れた大人が増えている…。)

規範意識や倫理観の未形成

善悪の判断基準が形成されておらず、罪の意識、恥の感情が希薄である。したがって、善悪についての指導が通じない、分からない、だから身に付かない…。

「何で？別にいいじゃん、誰にも迷惑かけてないし、私の勝手でしょ。他人にとやかく言われることないよ！」
本当にそれでいいのか…。

人間の尊厳の軽視

深刻な生命軽視の実態、年間2万～3万人ものおびただしい自殺者の数、それに占める50代、40代の多さ…。

そして、一向に無くならない深刻ないじめの横行…。

自尊感情や自己肯定感の低さの問題

「自分にはいいところがない」、「自分には人に誇れるものが何もない」、「自分はダメな人間である」、「自分に自信がない」

そう思って生きている子供の何と多いことか。失敗しちゃいけない、間違っちゃいけないと心身をカチカチにして生きている子供達…。その傾向は年齢が上がるにつれ、また、10年前より今の方が顕著だという。

今、出現している様々な教育問題の根底には、この自尊感情の乏しさ、自己肯定感の低さがあるのではないか…。

自尊感情とは「自分はまんざら悪い人間ではない」、「自分は価値のある存在だ」、「自分を信じられる、信頼できる」感情のことで、人間の生きる力の源泉となる極めて重要な感情と言える。

自尊感情や自己肯定感の高い人は、些細なことでキレたりはしない。

困難にあっても自分を信じて辛抱強く努力する。

挫折や失敗にも、「こんなことで終わってたまるか」と再び立ち上がる。

自分を大事にするように人も大事にし、人との良好な人間関係を築く。

自分の失敗や過ちを人のせいになどしな

い。

恥を知って、誇り高い。

まして、自殺など絶対にしない…。

子供に自信と誇りを！

道徳教育は子供に自信と誇りを育むための教育でなければならないと思う。